

みなみ

南区人権尊重啓発連絡会議だより



広報紙みなみのこと知ってる？

地域社会や家庭生活の中で人権意識を高め、人権が尊重される明るいまちづくりをめざし、南区の人権尊重団体の連合体が、毎年3月に発行しています。



バックナンバーと構成団体はこちらから

事務局
福岡市南区
生涯学習推進課
TEL:559-5172
FAX:562-3824

認知症の特徴として、今のことはすぐに忘れてしまい、できないことが増えていく、しかし昔のことは覚えていたりすることがあります。同居する家族は、ここに大きな戸惑いと不安を覚えるのです。記憶が欠け、活動が縮んでいくこと、満江さんがかわらず満江さんであるということ、どうやって折り合いをつけられるのかという問題です。

同居する家族の戸惑いと不安

映画は主に満江さんの日常生活を描きます。
(満江さんの孫)のまさきです。

令和7年度の南区人権を考えるつどいは映画による研修でした。認知症高齢者とその家族の生活を主題にした作品です。主な登場人物は満江さんという息子のゆういち、ゆういちの息子(満江さんの孫)のまさきです。



人権を考えるつどいのチラシ

映画上映「ペコロスの母に会いに行く」

& 交流カフェ



※ペコロス：小さな玉ねぎのこと

報告 南区人権を考えるつどい

令和7年10月2日(木)

南市民センターにて

- 映画上映 400人
- 交流カフェ 17人

二つの時間の流れ

映画の話に戻りますと、満江さんが今過ごしている生活とは別に、国民学校に通っていた子ども時代、夫と出会い、結婚し、ゆういちが生まれ、彼が小学校低学年になるくらいまでの期間に起こった出来事が、挟み込まれています。

つまり、映画の中では、満江さんの今を生きる時間と過去の時間という二つの時間が流れていると言えます。
高齢者本人の人生を理解することの意味

今の時間の満江さんはあたたかもジグソーパズルのピースが抜け落ちるように、記憶を失い、できることが減っていきます。

過去の時間の満江さんが生きる世界のジグソーパズルは、幼なじみとの交わりや、夫との出会いそして結婚、ままならない生活などが鮮明に息づき、ピースはすべてそろっています。映画では二つのパズルが次第に重なり、今のパズルの空白から過去のパズルの絵柄がのぞくような瞬間が訪れます。あたたかも二枚の絵柄が一つになるように。

ペコロスアフタートークcaféの様子



映画を観た後、お茶を飲みながら参加者で交流しました

令和7年度 福岡市人権尊重行事の紹介

第54回 福岡市人権を尊重する市民の集い(南区会場)
主催：福岡市人権尊重行事推進委員会

スマホ世代の子どもとどう向き合うか
～SNS、ゲーム、ネットいじめの問題を考える～

令和7年12月10日(水)
南市民センター文化ホール

●会場参加 182人 録画視聴 218回

講師 ジャーナリスト 石川 結貴さん



講師の石川結貴氏は、コロナ禍での自粛生活や文部科学省が進めるGIGAスクール構想によるデジタル化を背景とした子どもを取り巻くスマホやネット社会の問題について、私たち大人が今、何を、どのように向き合うべきかを、事例とともに分かりやすく語られました。

子どもを守るための大人の役割

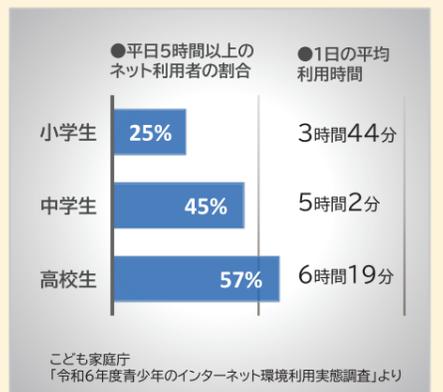
LINEのオープンチャットや動画配信などを通じ、子どもは簡単に見知らぬ人と交流でき、悪意ある大人の成りすましや脅しによる性的被害、誹謗中傷や炎上など、深刻な事例も示されました。こうした被害は女子だけでなく男子にも及んでおり、性別・年齢に関わらず注意が必要であること。また、スマホの「フィルタリング」設定を外すことを「子どもをブレーキのない車に乗せるもの」と例えられ、子どもを守るためのフィルタリング設定の重要性や、いじめ等が起きた際の相談先を大人が事前に把握しておく等、真剣に向き合う必要性を強調されました。

大人の強みと気持ちの交換

現実の世界に長く生活している大人の強みをいかし、ネットの世界にいる子どもたちを現実の場面に置き換えて考えさせることの大切さを指摘されました。そして、子どもがSNSに向かう背景には、気持ちを受け止めてもらいたい思いがあると述べ、親がテストの結果だけでなく「どんな気持ちだったか」をしっかり聴き、親の思いを子どもにも伝える「気持ちの交換」の重要性が語られました。

生成AIでは大切な人の人生は語る事ができない

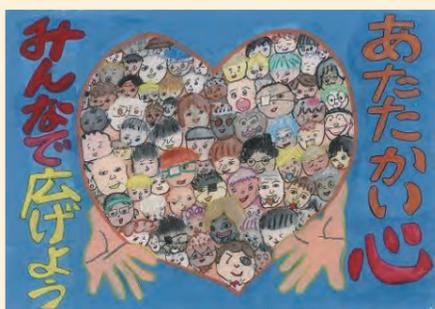
石川氏は、生成AIの便利さを認めつつも、子どもがAIに頼りすぎることへの懸念を示されました。AIは情報を整理することはできても、「誰かに必要とされる実感」や「働く意味」までは教えられません。だからこそ、家庭や地域の中で子どもが役割を持ち、感謝される経験を積むことが、自己肯定感を育てるうえで大切だと語られました。また、親や高齢者が歩んできた人生には、AIには代わるることのできない「人としての力」があります。その生きた言葉を子どもに直接伝えることが、子どもを支える大きな力になると結ばれました。



令和7年度
福岡市人権尊重作品
主催：福岡市人権尊重行事推進委員会



南区の入選作品を
ご紹介します



ちがうこと それはだれでも おなじこと

見えぬ声 見ようとすると 差し出す手

違いを大切に みんなでつくる 平等な社会

みんなちがう だからこそいい この世界

違いを 力に 未来を 笑顔に

差し伸べる手 小さな手でも 大きな救い

だいじょうぶ えがおとことばで 変えられる

校 区 に おじゃましま〜す!



わたしたちの校区はこんなことしているよ。みなさんの校区は？
人権教育推進員がおじゃましま〜す。次はあなたの校区に(^_^)

大池 ▶ 小学生パンづくり&思いやり学習 7/19~ 全5回

大池公民館のパンづくり&思いやり学習は、今年で32年目を迎える大人気講座。小学2~6年生を対象に、5日間で180人の募集がすぐに埋まってしまいます。材料にこだわったパンのおいしさを実感して毎年応募したり、兄弟姉妹で参加したり、夏休みの校区みんなの楽しみです。

洋菓子研究家の波多江彰子先生は、パンづくり教室が始まった1993(平成5)年から講師を続けています。

現在のスタイルは、志賀館長が12年前に公民館長に就任した時に、パンが焼きあがるまでの時間を利用して人権学習に取り組もうと考えスタートしました。

パンが焼けるあま〜い匂いに包まれて、南区の人権教育推進員が、子どもたちと一緒にDVDを視聴したり人権について考えながら過ごします。

波多江先生は、まだまだパンづくりを続けていきたいと元気に話しておられました。



[左]先生とスタッフのみなさん「焼きあがったパンを見た子どもたちの笑顔が楽しみ」
[上]カメさんパンに、カブトムシパン、みてみて〜!と子どもたち

野多目 ▶ 被ばくの実相を語り継ぐ 8/5

原爆投下から80年という節目の年に、長崎で10歳の時に被爆した松本隆さんをお招きし、当時の背景を生々しく語りいただきました。



講師の松本 隆さん(福岡市原爆被害者の会)「平和とは、与えられるものではなく、自ら創り出すものです」

その中で、当時の私が考えたこと(戦争を通して学んだこと)を3つにまとめ、話されました。

1. 食べ物のありがたさを知る
人は飢えると人が変わる
人は飢えると人が人でなくなる
2. 兵隊にならない方法はないかと真剣に考えた 死ぬ勇気より生きる勇気を!
3. いつ死ぬか分からない恐怖が続く戦争は嫌だ!
(死の恐怖と命の大切さを知る)

公民館の西山館長は、「小中学校では、6・19の福岡大空襲や原爆の悲惨さを学ぶ機会があるが、成人はどうだろう。新聞、テレビでは目にするが、直接語り部から聞く機会はほとんどない。

戦争の痛ましさは、頭では想像がつくが、現実のものとしてどうしても受け入れられない。しかし、これが戦争である。そして最大の人権侵害である」と。平和の尊さを改めて感じ、人権尊重推進協議会をはじめ、校区のみなさんと啓発活動をしています。



松本さんを囲むようにしてお話に聴き入るみなさん